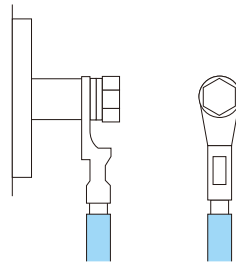


(1) 三相4線式端子の締め付け

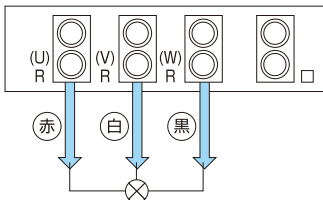
負荷を接続する時は、締付ボルトをスパナなどで十分に締め付けて下さい。もし締付が不十分ですと、焼損の原因となります。

(2) 三相4線式端子の接続方法

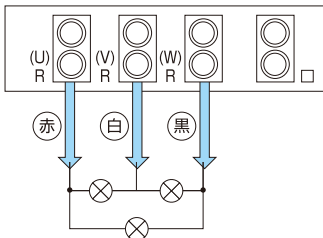
使用する負荷の相数と電圧を確認してください。



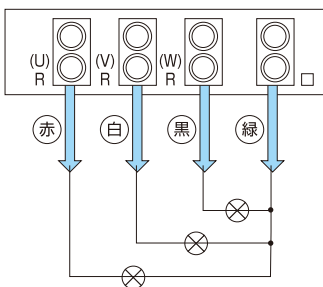
R,S,Tの端子に接続します。



三相負荷の場合
R (U)、S (V)、T (W) 使用
200/220V



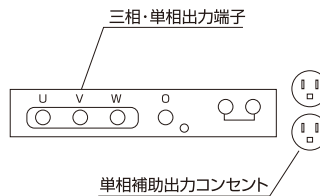
単相負荷の場合
R (U)、S (V)
S (V)、T (W)
T (W)、R (U) } 使用200/220V



単相負荷の場合
O、R (U)
O、S (V)
O、T (W) } 使用115/127V

(3) 単相出力(100/110V)

単相出力使用時は、その出力分だけ三相出力が低下しますので、



アースの接地方法

漏電保護装置を確実に働かせるために、次の設置工事を必ず実施してください。

(1) 本機の接地

出力端子板の漏電リレー用接地端子と外箱接地端子を下記により接地してください。

① 漏電リレー用接地端子の接地

設置用ケーブルの太さは、5.5 mm² 以上として下さい。

通常は付属のアース棒を使用できますが、接地条件により接地抵抗100Ω以下を満足できない場合は、接地表面積の大きなアース棒を準備して下さい。

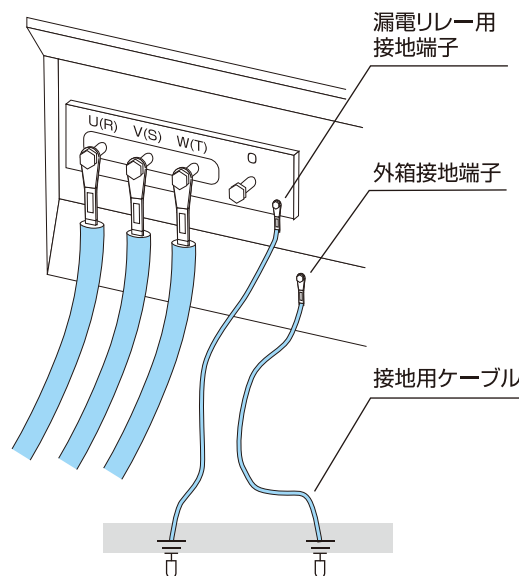
電気設備技術基準によるところのD種接地工事（第3種接地工事）で、接地抵抗が100Ω以下になる様に接地して下さい。

② 外箱接地端子の接地

接地用ケーブルの太さは、電気設備技術基準により発電機容量にみあった太さを選定して下さい。

下記接地抵抗を満足できるアース棒を準備して下さい。

電気設備技術基準によるところのD種接地工事（第3種接地工事）で、接地抵抗が100Ω以下になる様に接地して下さい。（ただし、使用電圧が300Vをこえる場合はC種接地工事（特別第3種接地工事）で、接地抵抗が10Ω以下になる様に接地して下さい。）



(2) 負荷機器の接地

本機の場合と同様に、負荷機器の外箱にも接地工事を施して下さい。

接地用ケーブルの太さは、電気設備技術基準により負荷容量にみあった太さを選定して下さい。下記接地抵抗を満足できるアース棒を準備して下さい。

負荷機器の接地工事はD種接地工事の（第3種接地工事）で接地抵抗は500Ω以下として下さい。

ただし、漏電リレーの感度が100mAをこえる（200mA・500mAなど）ものにした場合、使用電圧が300V以下であれば100Ω以下、300Vを超える場合は10Ω以下として下さい。



本機に漏電リレーが装備されているからといって、負荷側の接地を省くことは出来ません。負荷側の接地は漏電を少しでも早く検知するため是非とも必要です。もし接地をとらない場合は、漏電リレーをしない場合よりも危険な状態になりますのでご注意下さい。

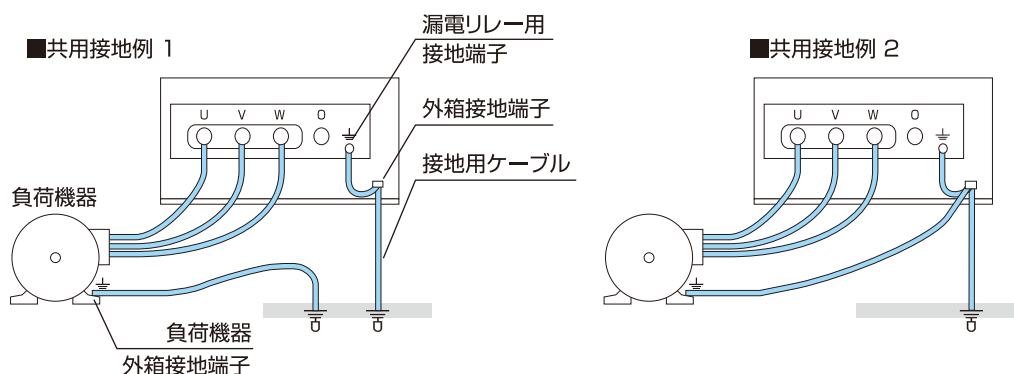
(3) 共用接地について

接地工事は、漏電リレー用接地、外箱接地、負荷機器接地を各々独立に接地することが原則ですが、独立接地が困難な場合等、現場の状況によっては下図の例のような共用接地が認められる場合があります。

但し、その場合次の点に注意の上、施工して下さい。

- ① 共用接地ケーブルの太さは、各接地に要求される太さの最大値として下さい。
- ② 共用接地の接地抵抗は、各接地に要求される接地抵抗地の最小値として下さい。
- ③ 特に各端子の締め付けを確実に施行して下さい。

尚、共用接地の可否につきましては所轄監督庁や現場管理者にご確認下さい。



交流溶接機使用時の発電機容量

定格電流 \ 使用台数		1台	2台	3台	4台	5台
300A	50Hz	50	50	80	80	100
	60Hz	60	60	100	100	125
500A	50Hz	80	80	100	195	195
	60Hz	100	100	125	220	220

- 表の発電機容量は、目安を示します。
- 表の発電機容量は、使用率40%時の容量です。
40% 以上の使用率の場合、発電機容量の大きいものを御用意ください。
- 溶接機を2台以上使用する場合は、1相に集中させず、各相に平均になるように接続してください。